

## 地域報告

### 「発達障がい者支援専門員との連携を通じて」

津久見市 津小なかよしクラブ 上野理恵

きっかけは一つの不安からでした。夏休みを前にしたある日、県連会長との勉強会でいつものように私たちは、その時のクラブでの一番大きな困りごと、ある一つの不安について相談していました。

#### <事例その① Aくんについて>

授業中運動場のビオトープで遊んでいることの多いAくん。支援学級の先生がついていくこともあるけれど、一人きりで自由に運動場で過ごしていることも多い彼。夕方裸足で道路を歩いていることも見かけたこともあり、よその家の庭に止めているバイクにまたがって倒したこともあります。

そのAくんが夏休みに、児童クラブを利用することになったのです。昨年一年生の時に何度か児童クラブを利用したAくん。一度は些細なことが原因で外遊びの運動場から飛び出してしまい、校外を歩き続け、支援員もついて戻ってくるまでに二時間近くかかったこともありました。久しぶりのAくんの利用。しかも夏休みといえ一日が7時間から9時間にもなる長時間です。担任の先生に相談すると、「勉強という枠がないから大丈夫でしょう」との答え。もしまた飛び出してしまったらどうするのか、支援員がつきっきりにならざるをえないことになります。

そこで保護者と話をする機会を持ちました。そこで初めてAくんがADHDだと聞かされました。そして児童クラブに行きたいと本人が言っていること。「クラブの外には出ない」「友だちに暴力を振るわない」と約束をした上で、薬も飲まないと決めたと言います。もし校外に飛び出しでも連絡だけしてくれれば追いかけてなくてもいいとまで保護者は言います。

でも私たちの不安はかえって大きくなってしまいました。さらに、その友だちも実は発達障がいであり、クラブの中にはそんな困りを抱えた子どもが何人もいたのです。



### <事例その② Bちゃんについて>

「土曜日のBちゃんは怒られにきているみたいやなあ」。ある土曜日にBちゃんのことを話している子どもがいました。人数の少ない土曜日、Bちゃんは感情が高ぶり、友だちに攻撃的な発言が多くみられました。パニックになってしまうこともありました。

「鬼ごっこにに入れていれて！」と友だちに答える隙も与えず、「あー！無視した無視した無視した」と叫ぶBちゃんについ大きな声で、「入れてくれるって言ってるでしょ」と言ってしまうたり、次から次へ「あれがしたい、これがしたい」と畳みかけられ、「あなたの思うようにばかりにはなりません」とむきになってしまうたり。主張を何度も変えてしまうBちゃんに、「さっきはこう言ったでしょ」と言ってしまうたり。

そんな時に、県連会長が発達障がい者支援センターECOALのスーパーバイザーの派遣事業を紹介してくれたのです。本当に有難いお話でした。

### <発達障がい者支援センターECOALからのアドバイス>

- ・叱られてばかりでは自尊心がなくなる。ほめ続けることが大事。
- ・あいまいな表現は理解できない。
- ・決定権は子どもに。
- ・行動には意味がある。なんでそうしたの？そうしないできる方法はあると思い？選択肢を提案する。違う方法を一緒に考える。
- ・注意をすると耳をふさぐ子には、話せるようになったら声をかける。
- ・パニックになっている子には一人で落ち着ける場所を。

### <アドバイスを受けて>

夏休みのAくんは、一度だけ友だちとトラブルを起こしました。

記憶が途中で欠落するBちゃん。その時々で彼女の中では真実なのだとわかっても、支援員全員がBちゃんのペースに巻き込まれず実践するのは、至難の業です。

限られた時間ではありましたが、三回のスーパーバイザーの来所で、何人かの子どもを実際に見ていただきました。ただ頭ではわかっても、支援員が共通認識を持つのは大変難しいことでもありました。

発達障がいのある子どもだけでなく、だれにでも同じように対応できるのが理想的だと思いながら、なかなか実現できない私たちですが、これからも勉強を重ねミーティングを通じて支援員全員で共有して、スキルアップに努めていきたいと思っています。

